

/特/集/  
まえがき

## 新しい社会運動の胎動

新井田智幸

毎週金曜の夕方、首相官邸前は騒然とした雰囲気に包まれる。続々と集まるのは、若者、女性、家族連れが目立つ雑多な人びとで、色とりどりのアピールグッズに覆われた人波からは「再稼働反対」の声が絶えることはない。

原発再稼働に反対する市民が継続的に行ってきた抗議行動は、大飯原発の再稼働を目前にして爆発的に大きくなり、ついには10万人単位が集まる歴史的な規模に膨れ上がった。社会運動は明らかに力を取り戻しつつある。

このような動きは、2011年来の世界的な民衆運動の動向と無関係ではない。アラブ革命やオキュパイ運動は、その新しい運動のスタイルによって、日本の運動をも変えてきた。

「フェイスブック革命」とも呼ばれるように、IT技術やソーシャルネットワークが活用されることもその一つだが、より本質的なのは運動の組織のありかたである。現在の運動の特徴は中心性がないことにある。リーダーのもと、明確な目標と戦術をもって闘うというスタイルではなく、ゆるやかな水平的ネットワークとして運動が形成されている。近年の運動の飛躍は、この形態が広く受け入れられたことによるといってよいだろう。

一方、その陰で、従来型の運動との連續性が強い政党の活動や労働組合運動は注目を浴びにくくなっている。しかし、そうした組織的な運動も、この潮流から影響を受けて相乘的に運動を盛り上げる役割を担っていることを見過ごしてはならない。

本特集では、世界および日本のこうした社会運動の動向について、いくつかの視点からみていく。執筆者はすべて若手研究者であり、

研究の傍らこうした運動にも関わっている者である。現場に足を運んでいる経験を踏まえて、こうした新潮流の特徴や意義についてそれぞれ分析がなされている。

原論文は、アラブに始まった世界的な運動の流れと日本の原発反対運動との関係について述べている。エジプト革命でみられたような運動のエースが日本の運動にも波及していることが描かれている。

島野・本田論文は、オキュパイ運動の現地を訪問し、そこで見た運動の様子や活動家との交流をまとめた見聞録である。この運動の特徴である運営のされ方などがリアルに伝わる内容である。

木原論文は、激戦となった京都市長選を題材に、政党の運動と新しい運動とが連携して力を発揮した局面を描いている。独裁政治に対抗するような運動の可能性が示唆される内容である。

梶原論文は、長い伝統を持つ原水爆禁止運動が3.11の核災害のインパクトから受けた影響、および今後の運動の課題について、若手活動家の視点から述べている。

最後に、座談会企画では、この新潮流の、民衆運動の歴史からの位置づけ、新自由主義イデオロギーとの関係、労働組合の役割などが議論されている。

こうした新しい運動は若者が中心に担っているというイメージで語られることが多い。しかし、今でも運動経験豊富な年輩の方が、陰に陽に支えていることによって運動は続いている。本特集は若手の視点から書かれているものの、運動の発展のために世代をこえて参考にできるものになればと願っている。

(にいだ・ともゆき：東京大学(院)、経済思想)

## ●特集● 新しい社会運動の胎動

# 〈座談会〉2011年以降の社会運動をどう見るか

3.11以降の脱原発運動を筆頭に、2011年は日本でも大きな社会運動のうねりが始まった年であった。その性格と展望について、運動に参加することで得た経験も踏まえて、若手研究者4人で議論を行った。運動史から見たときの1950年代の社会運動との対比や、新自由主義の深化との関係、労働運動の影響など、多様な角度から議論が行われた。

木下ちがや、佐々木啓、新井田智幸、後藤 達

木下：2011年という年は、1989年あるいは1968年といった、世界的な変動期として捉えうる画期的な年であったことは間違いないでしょう。

日本の場合は原発事故があったことで、ある意味強いられた形で世界的な運動の中に巻き込まれていきました。それから1年余り過ぎていったわけですが、みなさんは若手研究者でありながらデモにいき、さまざまな実践のなかで新たな出会いを獲得し、研究者としての集団形成など、さまざまな取り組みをしたと思います。

デモ一つとってもこれまでとは違う新しい流れが現れましたし、対抗運動のあり方もさ

## ● 木下ちがや（きのした・ちがや） ●

1971年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科修了。専門：政治学。著書（共著）：『民主主義・平和・地球政治』（日本経済評論社、2010）ほか。

## ● 佐々木啓（ささき・けい） ●

1978年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士（文学）。専門：歴史学（日本近現代史）。

## ● 新井田智幸（にいだ・ともゆき） ●

1981年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程。専門：経済学、経済思想。

## ● 後藤 達（ごとう・たつ） ●

1984年生まれ。大学院博士課程。専門：歴史学、日本近現代史。

さまざまなバリエーションをもって展開しました。こうしたデモとか運動について、論じ方はさまざまにあると思うんですけど、私たちは、歴史的なスパンで考え、かつ世界的な拡がりのなかでどう位置づけるかを考えながら議論をしていきたいと思います。

まずは佐々木さんから、この2011年以降の運動の歴史的な意味についての問題提起をしていただきたい。

## 1950年代の運動史から見た2011年

佐々木：この間、歴史研究は、さまざまなシンポジウムや企画出版みたいなもので、震災や社会運動の問題について扱うようになってきていると思います。また、日本近現代史、とくに戦後史のなかで議論されていることで、この間、1950年代の社会運動をどう位置づけるか、とくに文化運動、サークル運動のような、いわゆる「ユニークな小宇宙」のなかで、人間の関係の作り方であるとか、そこで発想されていた新しい政治との関係の取り結び方に対して、関心が広がってきたといえると思います。

そこと引っかけながら、この間のデモの特徴について考えるところを、少しだけお話ししてみたいと思います。

キーワード：脱原発運動（anti-nuclear power movement）、社会運動史（history of social movements）、新自由主義（neoliberalism）、労働組合運動（labor unionism）

1950年代のサークル運動について、注目すべきポイントというのは、大きく分けて二つあって、一つは独特な人間関係の取り方、作り方というものを、非常に意識的に当時の活動家やそこに集った人びとがやっていたということです。例えば、東京南部の下丸子文化集団や、あるいは三重県の東亜紡績泊工場の生活を記録する会の運動など<sup>1)</sup>、重要な運動はいくつかあるわけですが、そのなかで注目されているのは、ベタベタな関係っていうんですかね。日記とか詩とかを見せあったり、悩みを語り合ったりするような、その中で人と人が顔をつき合わせて議論し、それぞれの眼前の現実をどう変えていくかを話し合う雰囲気。そういう人間関係の作り方の独自性ですね。その時代的な特徴というものに対する関心が一つ強い。

その後の歴史的な展開を踏まえれば、1950年代という時期は、参加する人びとの境遇のある種の共通性や共時性みたいなものが大きい時期だったと言えるわけですが、しかしそうした一つひとつの問題に対して、すごく接近した距離感のなかで、共感し、話し合い、解決していく、そんな人間関係の作り方がなされていたという話です。

もう一つは、こうしたサークル運動では「文化」を一つの接点にしているので、そこでは表現するという実践のかたちがあるわけですね。そこに注目すべき点があるのだろうと思います。サークル運動は、詩とか版画とか絵とかその他の文章表現等々、いろいろあるわけですが、そういう作品を作るっていうことが持っている力への注目ですね。

それは、作品を作ることのなかに、ある意味では現実をしっかりと見つめていくっていう意識であるとか、現実に対してそれを内省的に捉える、そうしないと新しい表現が生まれないというわけですけれども、こうした

ふうに捉えることによって、現実というものを自分の眼で見つめ、それを作り変えていく、新たな力に変えていく、そのための表現であることが当時の運動のなかでは強く意識されているわけですね。

こうした運動は全体として、高度経済成長のなかでなくなっていくことになるわけですが、こういう二つの重視すべき要素がおそらくあるのかなという気がしています。

この間の2011年以降のデモの話であるとか、「脱原発並<sup>2)</sup>」の会議とか、社会運動の中におけるいろんな話し合いの持ち方とかを見ていると、今いった50年代のサークル運動が持っていた面白いポイント、力みたいなものがある種再び現れてきているような、そういう印象を受けます。

すごく密着した関係性みたいな話は、今と昔とではもちろん全然違うわけですけれども、しかし、「脱原発並」の会議とかを見ていると、一つの問題について共感したり話し合うこと、それ自体の意味みたいなものを強く意識しながら、その関係のなかで新しい解決策というものが出てくるという、共同的な人間関係それ自体が重要な要素になっていると思います。

もう一つは、やっぱりデモとかで面白い表現がいっぱい出てくるわけですよね。「糸」つてところの右側の「半」が「円」になっていたりと。ああいう、あつと言わせるような表現が数々あって、それは文章表現も含めてもそうですけれども、やっぱり現実の見つめ方や向き合い方みたいなものが、自分たちの手で書き、街頭に持っていく、という作業をとおして作られている。

1950年代的な運動は、結果として高度成長のなかでなくなっていくわけですが、半世紀以上の時間を経て、再び近いものが出てきているような印象を受けます。

木下：1950年代の特徴を話してもらったわ

けですが、確かに、運動はある限定された条件の中から出発せざるを得ないわけです。まさに原子力村と言われるような体制、非常に根深い日本の支配構造を根本から転換するためには、可能な限り多くの人たちと繋がらないといけないという強い動機が必要です。日本の場合、冷戦崩壊期を一つの画期にして、どんどん対抗的な運動が縮小してきたという経緯があり、その流れを巻き返さなければいけない。そういうリハビリテーションの必要性ということがいま佐々木さんが言われたような「脱原発並」デモといった地域主体の運動のあり方を大きく規定していると思います。

もう一つは、オキュパイ運動（ウォール街占拠運動）に特徴的な合意形成ですね。合意形成というのは単純に手続き的に正しいものを決めるのではなくて、手続きそのものの中に多くの人びとが主体的に参加していく、その過程のなかに、主体形成を埋め込んでいくっていう作業ですね。そういう意味では、オキュパイ運動と日本の反原発運動っていうのは、一定の共通点を持っていると思えなくもないわけです。

ただ1950年代と比較すると、当時のイメージは前衛主義が強いわけですね。つまり、ある特定の左翼党派を中心になって、そこから同心円状に運動が広がっていくというあり方だった。これは私の印象ですが、やっぱり2000年頃までの運動の主力はそうだと思うのですよ。どんなに小さくなっても、やはり中心があつてリーダーがいて。

ところが武藤一羊さん<sup>3)</sup>が指摘されていますが、原水禁運動の初期の運動は、同心円というよりもむしろ人と人との繋がりのなかで、横へ横へと繋がって、住民から住民へ、地域から地域へと繋がるという、そういうものだった。これは今のパターンとよく似ている気がします。

それから、人の関係形成を論じるときには、概して反政治的、脱政治的になる場合が多いですよね。サークル運動のとらえ方は従来はそう。ところが50年代には猛烈な政治的な対抗力を生んでいたわけです。そういう面からの捉え直しが必要なんじゃないのかと思います。

今の反原発運動の中のデモなどに対して、「遊んでいるだけじゃないか」「お祝いしてるだけじゃないか」という批判があるわけです。でも、本当にそうなのかと、「祝祭性」とか「有象無象」とか言ってることが果たして反政治的なのだろうか。政治的なものの再定義がここでは求められていると思います。

**佐々木：**サークル運動の評価は研究の中でもいろいろあって、そのなかには脱政治的な評価の仕方が流通しているという是有ると思います。労働組合とそのなかで作られていく文化運動、サークル運動みたいなものは、ほとんど敵対的に捉えられていて、要するに労働組合の「上意下達」的な行動様式とは異なる形で自分たちの小宇宙を作っていました、みたいなストーリーができやすいんですね。

しかし、実際には労働組合の方針そのものを文化運動が変えていくというか、そこには往還関係っていうのが、当たり前の話ですがあるんですよね。だからその意味で、これを脱政治的に捉えるっていうのは、やっぱりちょっと一面的なんだうなって思います。

**新井田：**運動の作られ方でいうと、この間その新しさが注目されているところがあつて、『災害ユートピア』<sup>4)</sup>という本がその関係でかなり注目されていたと思います。この本は、災害が起きたあとに既存の秩序が壊れたなかで、災害の現場で下からのネットワークで秩序ができるといって、既存の秩序とは違うなかで人びとがのびのびとイニシアチブをとれるようなユートピアが生まれるという話として

描かれていましたが、そこに著者のソルニット自身は運動への繋がりの面でかなり期待をかけているところがあったと思うんですね。今回の脱原発の運動は、そういうソルニットが言うところの災害ユートピア的な面がかなりあったと僕はみているんですけど、その辺の評価はいかがでしょうか。

政府がまったく信頼できないなかで、自己防衛するためにはそうするしかないという形で自然発的にできた運動という性格が最初の段階であったように思うんですね。

佐々木：ソルニットの災害ユートピア論は、歴史研究の方でも最近引かれるようになってきていますね。僕は、わりとソルニット的な、普段押さえつけられている人間の潜在的な共同性みたいなものが、災害というものに直面したときに解放されるという図式自体は、それなりに意味があると思っています。これは、3.11以後の運動にも当てはまるだろうと。

ただ、歴史的に見れば、関東大震災における朝鮮人虐殺の話であるとか、重い問題がそこにあるのも事実で、虐殺したこと自体を完全にエリートパニックという話に落とし込むことは、たぶんに非歴史的な見方になるだろうと思うわけです。

でも、別に彼女は歴史研究をしているわけではなく、近代社会の構造について、人びとの共同性が潜在的に押さえつけられているという一つの社会観というか、政治観みたいなものを、災害という題材をとおして提示してみせたということぐらいで受けとるべきで、その意味で歴史的に相容れない事実もある、みたいな話はあまりしても意味がないんじゃないかなという気がしています。

木下：ソルニットの『災害ユートピア』は、民衆はこういうものだという決め付けのもとで自己満足的な運動をやるのに対して、想像力を喚起せよという問題提起の書だと思いま

す。現在の世界の運動の特徴は「大衆的」なところにあります。そこで人びとの自発性はどう引き出されていくのか、そこにどのように関与していくのかという、実践的な視点から読まれるべきです。彼女が広く共感を生んだのは、いまの世界的な運動の課題意識にマッチしたからに他なりません。

### 新自由主義の浸透と対抗運動

木下：少し話を変えて、構造的な話をしたいと思います。批判的な社会理論、社会科学の流れで、ほぼ意見が一致しているのは、現在のような運動が生じる背景には、新自由主義の世界的な拡大深化と社会の格差化の劇的な進行による社会統合の弛緩があるということだと思います。日本もそういう側面があって、実際に原発震災の前から格差社会に反対する運動が、リーマンショック後のあたりから出てきたわけです。

世界的な経済的な変動と同時に、日本の歴史的な構造との関係がどうなっているのか。日本の場合、保守的なシステムが企業社会の核としてあって、実際に新自由主義改革によって収縮はしているものの、社会的な規範として依然として強く残っていることがあるわけです。

新井田：この間の運動をみていて企業社会の内と外のかなりの温度差を感じるところがあります。男女で原発への反対と賛成が正反対に分かれているような世論調査がありましたけれども、それはおそらく企業社会の中心にいる男性正社員に代表される層と、もう少し企業社会から距離を置いた女性の主婦層なんかの意識の差がものすごく大きいことの象徴なんだろうと思います。

この間の新自由主義の路線っていうのは、震災以降弱まったかというと、まったくそうはなっていませんね。さつきの災害ユートピ

アとは真逆の視点ですけれども、『ショック・ドクトリン』<sup>5)</sup>という本をナオミ・クラインが書いていて、大災害が起きたときには、社会の側の抵抗力がいったん落ちるので、その隙に、資本の側が前もって進めたいと思っていた新自由主義的改革を一気に進めるという描き方で、世界中で起きている新自由主義の歴史について語っています。

今回の3.11で、日本でそれがどんなふうに現れたのかというところを見るというのも、新自由主義の歴史を見るうえでは重要な視点だと思います。一時期、東北州をつくって復興特区にするみたいな構想が盛んでしたし、復興のためには消費税を上げなければといって「社会保障と税の一体改革」が今強引に進められようとしています。

同時にTPPをやって日本を開国していくかないと、国際的に日本は遅れるんだという話とか、さらにそれと同じように位置づけられて、原発を動かさないと電力が不安定になり企業が逃げていくぞとか、そういう話がずっとやられてきているわけですね。

これはまさしく新自由主義的な路線の追求ですが、ショック・ドクトリンという形で急激に進んだかというと、かなりの反発を受けて、すんなり進んでいないともいえると思います。それは運動が押し返している効果だといつていいくと思いますが、運動の側もそう簡単にその圧力を押し戻せずに膠着状態にあるといえるだろうと思います。

新聞やテレビを見ていると、大枠では消費税にしろ原発にしろ、現実的に考えてそれを進めるのは仕方ないという論調で語られていると思いますし、半ばそうしなかつたら大変なことになるという、脅迫めいた宣伝が膨大に垂れ流されていますね。東電に対する批判にしても、マスコミが当然やるわけですが、その批判の仕方にも、新自由主義的なところ

があると思うんです。東電は、事故を起こした責任があるから社員の給料をとにかく下げて、それを賠償に回すべきだと、そういう発想ばかりになっていて、公務員の給料を下げる財政赤字を何とかしろっていうロジックとすごく似たものを感じるわけです。

また、電力を自由化すれば電気代が下がるのだから、自由化を進めるべきだという議論もあります。そういう話はもちろん脱原発の世論と重なるところはありますし、地域独占の問題があるのは当たり前なのですが、運動側が持っているような批判とマスコミも一緒に乗れるような批判が重なったところで、結局、市場に親和的なところだけが突出してしまうのではないかという懸念があります。

今の脱原発運動もそうですし、さっき話があつた原水禁運動もそうですが、生活者の視点で、日々の食の安全をどう守るのかとか、そういう話が共感を得て拡がっていくという形で始まっていますね。

今回でいうと、やはり子どもを守らなければいけないだとか、安心して外に出られるために、ホットスポットとかは除染しないといけないっていう話です。やはりそこで暮らす者が生きていくための要求という形ででていると思うのですが、そういう要求をあげるのは企業社会の周辺部にいる主婦であるとか、大学院生であるとか、フリーターのような企業の中心的な所にいない層が大半だと思うし、デモに行ってもそういう層が来て運動を盛り上げているなと思うわけです。

一方で、もう少し狭い意味での消費者視点での世論があるような気がします。もちろん安全な物を食べたいとか、安全な所に住みたいとか、当然の要求ではあるんですが、ある意味、個人主義化した要求になっていて、安全性が確保されれば、自分にとってはそれでいいっていうところで止まるようなところが

あるような気がしています。だからこそ電力自由化とか、そういう話が好まれると思うんですね。

そういうものも含めた、いろんな力学があると思うのですが、全部重なるところでいうと、電力を安定供給しつつ自由化に向かうというように、いつの間にか、脱原発よりも自由化みたいなところばかりが取り出されてしまうのではないか。そういうふうにある意味、この世論が乗つとられるような危険性もあるかなと心配しています。

さつき佐々木さんが言ったみたいに、昔の運動は緊密な人間関係のもとでそれが労働運動とかにも繋がっていったと思うのですが、今の運動はそういうところが一部はあるにせよ、けっこう個人主義化していると思うんですね。それは、新自由主義がこの間いかに根強く浸透していたのかってことになるんですけども、だからそこをさらに乗り越えていかないと、本当に脱原発がやり遂げられるか不安が残ります。

木下：ある種の個人主義というか、高度成長以降の日本の企業社会のシステムが持つ個人主義的な側面というのが、依然として残存している側面はありますね。例えば瓦礫広域処理反対運動を見ていても、反対している人々は、おじいさん、若者、子どもを持つたお母さんといった企業社会の外部の人たちです。

他方、企業社会内部の人びと、つまり男性サラリーマン層が、食の安全などの放射能汚染への懸念は弱い傾向にある。ここには階層的な問題が横たわっており、経済的な地位だけではなく社会的な地位も含めて、企業社会的なイデオロギー編成と対抗関係が、依然、社会を掘んでいるという側面があると思います。

佐々木：新井田さんの話のなかで、震災によって新自由主義的な政策はとくに変わっていないということでしたが、より悪化したのか、

それとも元から新自由主義だったものがずっと続いているだけなのか。もちろん政権は野田政権に変わってしまったわけですが、その後ろにある、力関係の変化をどう評価するかが大事かなと思います。民主党の変貌をどういうふうに捉えるかは、けっこう重要ですよね。木下：鳩山政権は、評価はさまざまな幅であるにしても、少なくとも小泉改革と対米従属に対する一定の批判を掲げてはいた。民主党のなかには右翼もいるし、対米従属派もいるのですが、それを抑え込むかたちで2009年の選挙で民主党が勝ったわけですよ。その力学が菅政権で完全に失われていくなかった3.11を迎えてしました。そしてこの過程で生じた政治不信を食う形で橋下が台頭してしまった。

新井田：橋下現象で言うと原発についていろいろあります、格差社会に対してはまったく反対する立場はないわけで、民主党を押し上げたような格差社会に対抗するエネルギーはどうなってしまったのかと感じのですが。

木下：先進国一般においては、中産階級と労働者階級との関係を分断し、福祉国家を崩していくのが新自由主義の戦略なわけですけれども、労働運動はこれにどう対抗したのですよね。労働運動といつても、さまざまにあるわけですが、格差社会に反対したり、社会保障を守っていくということを含めた、社会的な平等を実現していく重要な勢力である労働組合が日本や世界でどうだったのか。後藤さん、話してもらえますか？

### 社会運動における労働運動の力

後藤：僕は労働組合の専門家ではありませんので、話せることは、数年間、個人加盟ユニオンのそばでうろうろしていた一研究者として、2011年までをどう見れるかっていう話

なると思います。

民主党の労働・貧困問題に関する政策を考えるには、各ナショナルセンターの動き・関係が決定的になるとは思うのですけれども、それはみんなでやっていくべき課題だと思っています。

2011年以降の運動は、運動家とか知識人のなかで、脱中心性とか水平性といった言葉で語られたと思います。それ自体はよいことで新しいこと、佐々木さんの話だと再帰的であるという話で、僕もそのとおりだと思うのですが、世界の運動がそれだけで説明できるかというと、おそらく違うだろうと思っています。

まず、見過ごされがちですが、昨年の運動で非常に大きな規模で展開されたのは、ヨーロッパだと思います。政治的インパクトという点で言えば、アラブが非常に強烈だったと思うんですけれども、新聞とかテレビを見てもらえばわかるように、数十万人規模のデモを軽々とやれるのはやっぱりヨーロッパで、そのなかには労働組合がかなり強く動いていたであろうことは間違いないと思います。

日本においても、頻度の点においては草の根のデモとか「素人の乱」が、反原発でかなりがんばったと思うのですけれども、国内で最大の規模となった6万人集会をやれたのには、労働組合の力が大きかった。

それからアメリカですね。2011年だけ取り上げる必要はないと思うんですけれども、オキュパイ運動のゼネラル・アセンブリがかなり注目されて重要だったわけですが、それに対して、労働組合が支援に乗り出していた話も忘れるべきではない。さらに、3.11の前にはウィスコンシン州での州知事による公務員つぶしがあって、それに対する反対は労働組合を中心に起こって、それに市民が連帯するかたちで発生しています。それも映像や文字を見ればわかるとおり、議事堂に対する

「オキュパイ」と文章や言葉のなかで表現されています。

そういう労働組合の運動の伝統がヨーロッパには見られるし、アメリカにもあると言えるのでないかと思っています。最初に言ったような中心的であるか、脱中心的であるかという話では、「素人の乱」と古くからある組織が性質が同じであるとは思いませんが、絶対的に対立しているとも思っていないわけです。

先ほどのアメリカの例ですと、労働運動が市民運動、社会運動に扉を開いていて、一緒にやろうと努力してきた。ヨーロッパとかは労働組合の組織率が、そんなに高くない国でも、社会的なインパクトが非常に強い。外への公開性みたいなものを確保しようとしてきた労働組合というのが、外国では、今も強くがんばっていたのではないかと思います。

翻って日本の場合は、労働組合がそれを十分に果たしてきたか、これはいろいろ議論しなくてはいけないと思うのですが、今後の展望や期待という話であれば、青年ユニオン等の若年層向けの労働組合がかなり早い段階で、「素人の乱」のデモ等に旗を持って参加していた。それから「(全国一般東京) 東部労組」なんかもいたと記憶しています。

やはり、そういう組合は派遣村の運動にも見られるように自分たちの利益だけを求めて、仕方がない、社会的な連帯を作らなくてはいけないと、この間がんばってきた。そういう経験が、反原発デモへの参加の早さと関係しているのではないかと思います。

それから、政治との回路の話では、震災の被災者の電話相談の受付けをし、制度の利用の仕方を被災者に伝える一方、制度の改善を求めるといった動きが起こりました。あれは、派遣村とかの蓄積のうえにやられた技だと思います。

木下：2011年の運動前のこととは大事で、実

際エジプト革命も、地方に行くと主力は労働組合なんですね。末期のムバラク政権は新自由主義に傾斜し、パンの値段が上がったことが革命の火ぶたを切ったといわれています。あくまで生活要求から出発しているわけですよね。

それと、ムバラクの息子が進めてきた規制緩和政策に対抗して、労働者たちが組合の組織化を進めていたわけです。こうした営為があつたからこそ、スエズ運河の大ストライキといった大衆行動が可能だったわけです。

タハリール広場だけですが進んでいたわけではなく、むしろこうした労働運動、職場を媒介にした広がりが、タハリール広場というスペクタクルな空間の厚みを与えていったというのが実態でした。それが日本の場合にはどうだったと考えられるでしょうか。

後藤：新井田さんが話した企業社会の話とも直結する話ですよね。

新井田：労働組合が所詮利益集団だと思われてしまうと、すごく支持を失いますよね。現状では、組合といえば、ただでさえ恵まれている正社員の利益だけを守るものと思われて、他の労働者から敵視される存在になっているように思います。

もちろん青年ユニオンとかはそれとは違うイメージで、当事者の紛争解決だけでなく社会運動として、いっぱいサポーターを集めながら、いろんな人を支援してやっていますし、それを知つていれば、青年ユニオンが労働問題じゃないのに脱原発デモにくることには何の不自然性も感じませんが。

木下：組合の「特権性」を叩くというのが新自由主義の手法なわけですが、それに対して2011年の運動は、社会を開いていく、手を伸ばしていくという傾向があった。ローカルユニオンは、とりわけそういう指向性を持ったと思います。

佐々木：デモの参加者の声とかを聞いたり読んだりしていると、従来の労組がやっているようなデモは、何となくみんな張り合いがないような感じに見える、という話がたまにでてきますね。それに対してローカルユニオンとか個人加盟のユニオンが支えているようなデモは、みんな生き生きしている、と。

この点、高度成長の問題と関係があると思うんですが、企業社会のなかでの労組のあり方、それこそ既成の運動のもつている性格との対比で新しさが捉えられている気がします。大きい意味での企業別組合と現在の新しいタイプの組合の違いとか、そのあたりをどう捉えればいいのでしょうか。

後藤：労働運動全体をどう理解するかについては、難しいです。ただ先に述べたように、2011年以降にも積極的に動き続けた労組はいくつもありました。派遣村・民主党政権の成立の時点と、各ナショナルセンターの在り方、関係がどう違っているのかについては、今後考えないといけません。あの時期とでは、労働問題・貧困問題に対するマスメディアの態度も変わりました。

派遣村の評価なんですが、インパクトが非常に大きく、いい意味で政治化し、運動的な技術が蓄積されたと思います。ただ、あれが2011年に起きた各国の巨大な労働運動・社会運動と同じであったかといえば、難しい。

木下：新井田さんが指摘されたように、政治は新自由主義のほうに確実にシフトしていました。復興だ、ボランティアだっていう話はするけれども労働問題は脇に置かれていく。労働運動が不可視化されたというのが確実にあったと思います。

### 運動を通じた視野の広がり

後藤：日本みたいな島国に大量に原発を作った歴史を考えたら、それを受け入れてきた都

市や地域の在り方を考えないと、反原発自体がそもそも達成できるか怪しくなってくる。

**新井田：**今でも原発に反対する人は多数派ですが、まだ政策転換を決定づけるほどではありません。潜在的にはもつと多数派だと思うんですが、それを引き出すのが難しい。原発を丸ごと違うエネルギーに変えるとなれば、ものすごく大きな構造転換が必要ですからね。

それが必要だと思いながらも、いま国がそういうことをやってくれそうな雰囲気が皆無なので、それならどうなるか分からず路線よりは、再稼働やむなしというような現実路線になっている印象があります。インタビューを聞いていても、大飯町の地元の人が複雑なことを言っていますし。

**後藤：**原発を受け入れていく地域があつて、実際にはそこには原発の危険に見合つたりターンなどないのだけれども、そう思わざるをえなくなっていく。これは、中嶋久人さんが強調されています<sup>6)</sup>。

**新井田：**それに対して、リターンを受け取つたんだからすべて甘受せよっていうような世論も一方であるように、自己責任論の発想というのは相当根深いと思います。脱原発って、単に再稼働を許すかどうかみたいなミクロな話ではなくて、根本的に考え方を変えないといけないということですね。

ただ、震災をきっかけに変わるチャンスがなかったかというと、エネルギー政策でいえば転換のチャンスが来ているわけです。格差社会については、今はほとんど取り合われなくなってしまいましたが、去年ぐらいには、家も何もかも全部流された人に対して、どう生存を保障するかってところで、もっと生存権保障を実効的なものにする路線も考えられたわけですよね。それこそ憲法25条の具体化という話です。

被災地の人は今でも証明書があれば医療費

が無料になるとやっているように、やっぱり社会がそこまで危機的な状況に陥つたら周りでそういうかたちでカバーしていかなければいけないというのがコミュニティの必然的な要請です。

その要請をもっと拡大していくのが本来の社会保障のあり方だっていう方向で、その拡大を求める運動をやっている人はいっぱいいるわけですが、それが主流にならなかつた。

その意味では、災害のインパクトを受けて、原発の方では運動側がヘゲモニーを守つた一方で、社会保障の側ではもつていかれたっていうような評価になるのかなと思います。ただ、それぞれがまったく独立しているわけではないので、脱原発運動が力を持ち続けて政治を動かしていくば、反貧困の運動などにも確実にいい影響は与えると思います。

**木下：**反原発運動は、シングルイッシュのものだって言われますよね。本当にそうなんでしょうか。原発にただ機械的に反対している運動じゃないと思うのですよね。長いスパンでみれば確実にもつと広がりを持って捉えることができる気がするんですが。

**佐々木：**シングルイッシュでたたかう主体を評価するのは、難しいところがあると思つていて、それはやっぱりシングルイッシュに眼目を置いた住民運動が企業の外側で行われてきたということを、一つはどう考えるかという問題があるわけですね。

労働者階級そのものの横の繋がりの弱さみたいなものと、企業別組合と地域社会の住民の利害関係をうまく一致させて主体化するだけの協力関係を築けなかつたという問題が、歴史的にいえば、あると思います。

そう考えると、この間の脱原発運動の盛り上がりを、シングルイッシュからさらにひろげていくことを展望するために、歴史的にこれを位置づけることをやってみたとして、

何か似たようなものがはたして過去の経験のなかにあるかと言われると、なかなかないのではないかという気がします。その点、今回の運動の新しい側面なのではないかと。

先ほど話の出た運動内部のなかの主体化の契機みたいな話は、その意味でもやはり重要な思っています。高度成長にともなう企業社会の浸透という話と、新井田さんが触れられていた、消費社会の拡大の話ですね。それは一方では、消費文化の拡大でもあって、中西新太郎さんが指摘しているところでは、消費文化の浸透は人間の個体化を進めるというところがあるわけですよね。

その二重の分断のなかで、ある意味50年代的な、社会と個人を繋げる回路、あるいは政治と個人を繋げる回路が破壊されてきたっていうことなのかなと思います。

それが、この間の地域を軸にした運動、「素人の乱」や「脱原発杉並」の運動の拠点になった高円寺とか、あるいは後藤さんから話があつたようなローカルユニオンであるとか、そういうものに人が集ってそこを軸にして社会を開いていく、政治を開いていく動きがでてきている。

参加者相互の議論、合意形成に手間と時間をかけるこうした集団は、それ自体シングルイッシュにとどまらない主体化の基盤となるのではないかと思っています。

後藤：他の政策はそのままにして原発だけやめるというのは、なかなか考えられない。社会も政治もシングルイッシュで動いていないっていう話ですね。原発反対のシングルイッシュで実際に運動している人たちとは立派だと思いますが、やはり、経済成長の言葉の前で黙ってしまったり、原発を受け入れざるを得ないと判断した地域とか、そういう人たちに対してシングルイッシュで反原発だけ貫けって言えるか。それは無理で、政治

のなかで問題がでてきて、原発を考えるにしても、震災前と大きく変化をしてしまったとはいえ、日常の中でみんな考えているのだと思います。

木下：2011年の運動を研究者の問題意識から捉えると、やはり個別の分野を超えた全体性の回復というのが、これまでになく問われたんじゃないでしょうか。そういう視座をきちんと持つことが、どれだけ大事かを教えてくれた気がします。

新井田：研究者として新しい関係をつくっていったことで、学問と社会とのつながりをより認識できるようになったというのはあります。だから、JSAにもあったような科学者運動の原点にあるような経験を、若手研究者は3.11で体験したといえるんじゃないでしょうか。原発をめぐっても長期戦になるわけですが、そこは学際的に連携して、対抗しなければならない。それが研究者としての使命だろうと思います。

(収録日：2012年5月31日)

#### 注および参考文献

- 1) 下丸子文化集団については、『現代思想』「増刊号：戦後民衆精神史」（青土社、2007）を、生活を記録する会については、三輪泰史『日本労働運動史序説』（校倉書房、2010）を参照。
- 2) 脱原発の一一致点で幅広い市民が参加して作り上げている、杉並区中心の運動、「有象無象」による運動を標榜し、オープンな会議を重ねることで独創的なデモやイベントを次々成功させている。
- 3) 武藤一洋「50年代原水爆禁止運動のなかの平和利用論」（ピープルズプラン研究所連続講座「運動史から振り返る原爆と原発」）[http://www.peoples-plan.org/jp/modules/open/index.php?content\\_id=5](http://www.peoples-plan.org/jp/modules/open/index.php?content_id=5)  
(最終閲覧日：2012年6月12日)。
- 4) R.ソルニット『災害ユートピア』（高月園子訳、亜紀書房、2010)。
- 5) N.クライン『ショック・ドクトリン』（幾島幸子、村上由見子訳、岩波書店、2011)。
- 6) 中島久人「原発という『犠牲のシステム』を正当化するリスクとリターンの『等価交換』—東日本大震災の歴史的位置」  
<http://tokyopastpresent.wordpress.com/2012/05/12/>  
(最終閲覧日：2012年6月15日)。